

**■認知症について**

《認知症とは》

脳の最も重要な機能は「知覚し、記憶し、判断し、評価する」、つまり「知ること」にあります。この「知る」機能が低下していく状態が認知症であるといえます。このため、認知症では他の病気と際立って異なる特徴があります。

多くの病気は、体の不具合から自身の病的状況について自覚することができます。また、たとえ無症状でも、検査の異常を医師から説明されれば、それを了解することができます。そして自分の病気を「知る」ことにより、自分はどのように病気に対応してゆけば良いのかを考えることができます。

一方、認知症ではどうでしょうか。認知症の人は「知る」能力に問題が現れるため、自身の状況について判断ができにくくなります。また、自分はどうすれば良いかという対策を立てることが困難になります。

そのため、認知症の人に対しては、どうしても周りの方々が本人に代わって病気のことを「知り」、対応や対策を考えなくてはならなくなります。認知症の人の「知る」能力の不十分な点を補い、安心して生活できるように支援する必要があります。

《認知症を引き起こす主な病気》

認知症の代表疾患は、アルツハイマー病、血管性認知症、レビー小体型認知症、前頭側頭型認知症です。

**① アルツハイマー病**

➤原因

脳の神経細胞が広範囲に変性し、脳全体が萎縮していきます。脳の変性は徐々に進行し脳全体の機能が低下するため、重症化しやすいとされています。

➤具体的な症状

はじめは記憶障害がみられ、進行すると場所や時間、人物などの認識ができなくなったり、身体的機能も低下して動きが不自由になったりします。進行の度合いには個人差があります。

**② 血管性認知症**

➤原因

脳梗塞や脳出血など脳の血管障害によって、脳細胞に十分な血液がいきわたらなくなり、脳細胞が死滅することにより発症します。

➤具体的な症状

手足の麻痺や視力障害など神経障害を伴うことが多く、発作を起こした部分の機能は損なわれますが、脳全体の機能が低下することは少ないです。

### ③ レビー小体型認知症

#### ➤原因

脳の神経細胞内に「レビー小体」というタンパク質を主成分とする物質が脳皮質全体に多く出現するため「レビー小体型認知症」と呼ばれています。他の認知症と比べて脳皮質萎縮に差異はありませんが、後頭葉の血流低下が特徴です。

#### ➤具体的な症状

記憶障害が多いなどアルツハイマー病に似た症状がみられます。特徴として初期から「幻視」が多く見られることがあります。パーキンソン病の経過中に幻視や認知機能障害が加わった時には、レビー小体型認知症が疑われます。

### ④ 前頭側頭型認知症

#### ➤原因

脳の神経細胞が前頭葉と側頭葉を中心に変性し壊れていくことによって、いろいろな症状が出てくる認知症です。

#### ➤具体的な症状

他人に配慮することができないとか、周囲の状況にかかわらず自分が思ったとおりに行動してしまう、といった性格変化や行動異常がみられます。

(「船橋市認知症ケアパス」より抜粋)

#### 《認知症の中核症状と行動心理症状》

認知症の症状は、脳細胞が壊れることにより起こってくる**中核症状**と、その中核症状がもとになり、本人の性格や素質、周囲の環境や人間関係などが影響して出現する**行動心理症状**があります。

#### ① 中核症状とその具体的な症状

記憶障害	・ 同じことを何度も言う、聞く。 ・ すぐ前のことを忘れてしまう。
見当識障害	・ 時間や場所、季節感がわからなくなる。 ・ 家族のことがわからなくなる。
理解・判断力の障害	・ 考えるスピードが遅くなる。
実行機能障害	・ 新しい機械が使えない。 ・ 物事を順序良く進められない。

#### ② 行動心理症状（周辺症状）

中核症状に、環境や身体状況、本人の性格などが加わって起こる二次的な症状です。主な症状は抑うつ、不安、幻覚、妄想、ひとり歩き、暴力などですが、周囲の正しい理解による適切な支援や対応で改善することがあります。